



特集

公共施設の未来

公共施設マネジメント課 66・1214

ID 0275966

市では、図書館などの機能を兼ね備え、市民の居場所や活動拠点となるような場を蒲郡駅周辺に整備する「リーディングプロジェクト」を進めています。今号では、新しい公共施設への取り組みについて解説します。

社会の変化と公共施設マネジメント

日本では、戦後バブル期にかけて人口が増大し、多くの公共施設が建設されました。本市も例外ではありません。人口減少が進む中、老朽化していく公共施設たち。限られた財源の中で多様化する市民サービスを賄いつつ、将来に負担を残さないように公共施設を維持することが求められています。

リーディングプロジェクト始動！

公共施設のあり方が見直される今、図書館や市民会館のホール、中央公民館などの機能を核とした新たな空間を作るプロジェクトが動き始めました。どのような施設にするかは、有識者で構成されたデザイン会議や市民が参加するワークショップで出た意見をもとに決定します。



人とともに公共施設も変わっていくとき

デザイン会議代表
名古屋大学大学院工学研究科教授
恒川 和久

高度経済成長のときは、市民の生活を豊かにするために図書館やホールなどの立派な公共施設をつくっていました。その頃はよかったのですが、人々のニーズが変わってもなお、以前の考えのまま施設が運営されていました。公共施設の見直しがうたわれたのは、老朽化が目立ち始めたこの10年くらいでしょうか。

このリーディングプロジェクトでは、機能を複合化した施設を検討していますが、複合化には大きなメリットがあります。違う目的を持った人同士が会う・新しいことが起こるきっかけをつくることのできるのです。元の施設がなくなると、そこでの出来事を思い出して少し寂しく思うこともあるかもしれませんが、愛着の湧く場所が増えていけばまちの魅力にもつながっていきますね。



図書館というと、「本を借りるところ」「勉強するところ」と思う人が多いでしょうか。確かに図書館は長い間「本の館」であり、運営側も地域にただ1つの情報拠点と考えていました。しかし、インターネットの登場で私たちの生活は大変身。今、紙の地図や辞典を使う人はどれくらいいるのでしょうか。人と情報のつながり方はすっかり変わったのです。

「知る」ことの変化を受けて、図書館はデジタル情報を提供する場や人が表現する場、子育て支援の場など、さまざまな機能を併せ持った施設へと変わろうとしています。リーディングプロジェクトで検討する施設は、対話を可能とし変化し続ける「まちの広場」「知のコモンズ」となる空間を目指して考えていきたいと思います。



本の館から知のコモンズへ

デザイン会議メンバー
前県立長野図書館長
平賀 研也